



サンプル【チョロいよ！ショータ君☆ 学校の七不思議】

いば神円(しんえん)

主人公…シヨータ♂

黒髪黒瞳の美少年。よく美少女と間違えられる。色々な、えっちな怪談にあつて快樂が大好きになつちやう子。

学校の、えっちな七不思議♡

一怪談・花男先生

二怪談・壁キノコ

三怪談・保健室プロレス

四怪談・開かずの引きずり部屋

五怪談・動く人体模型

六怪談・十三怪談の鏡

七怪談・????

基本は、おにシヨタ♡

キーン……コーン……カーン……コーン……キンコーン……カンコーン……

とある学校の放課後。帰宅をする子達が減っていき閑散し始めた喧騒の中、少年達が机や椅子に座り喋っている。

「学校の七不思議？」

「そう、本物かどうか調べてみねえ？」

「ええ？ 何と何があるんだっけ」

「確かトイレの花男先生……？」

「んん知らない」

「えつとね、シヨータ君に教えると元々、若いイケメンの先生で子達が大好きでトイレの掃除を積極的にしてくれてたらしくて花瓶に花も生けてくれたらしいんだけど……ある日、学校を辞めたと思っただけの時折、掃除をしていて挨拶を

してくるらしいよ」

「綺麗好きの、めちやくちや良い先生だね」

「ボクが知ってるのは壁キノコ」

「ええ、なにそれ〜？」

「シヨータ君に説明するとね、なんか突然、キノコを生やすらしいよ」

「キノコ生えてたって何？　って感じがするね……」

「俺が知ってるのは……保健室プロレスマン」

「どういうこと……？」

「シヨータに説明すると、保健室で寝てたら急にプロレス技をかけてくるらしいぜ。あと終わったら解放されるみたいだな」

「わあ……迷惑だね」

「自分が知ってるのは開かずの引きずり部屋ですな」

「こ、怖そう……」

「シヨータ殿に説明すると、手のようなモノが伸びて引きずり込んで精気をギリギリまで搾りとられるらしいですぞ」

「こ、こわく！」

「はいはい！ オレが知ってるのは走る人体模型！」

「あ、つばいね。学校の怪談って感じがする」

「でしょでしょ！ シヨータに説明するとー確かね、追いかけるのが好きで朝まで遊ばれるらしいよ」

「えく寂しいのかな……？」

「シヨータ君は何か知らない？」

「オレ？ うーん……あ、十三階段の鏡」

「なにそれ、なにそれ」

「聞きたい教えて」

「なんかねーどつかの階段を数えて進むと丁度、十三階段で踊り場に今までな

かった鏡が現れて、それで鏡の世界が異世界に繋がってるって話」

「えっ」

「マジか！ 勇者になるとかかか!？」

「異世界行くパターンの苦勞バージョンかもよ〜」

「あーゾンビの世界とか嫌だな」

「確かに絶対ヤダ」

「即、死亡〜!」

笑い合う少年達。

「あ、今ので六怪談だね」

「そうだな〜…あと一つって何だっけ？」

「何か、ド忘れしたかも」

「うーん？ ま、とりあえず一個クリアしよーぜ！ とりま今日は、どれにする？」

「まあ、一番簡単そうな花男先生じゃない？」
「んじやーそれにしようぜ」

一怪談

一怪談。

シヨータ達は六人で何処のトイレが正解か話ながら辿り着いたら一人が排泄し戻ってくるという流れになった。先ずはシヨータからだ。

「漏れそうだったんだよねー」

シヨータは特に怖さは感じずに普通に尿意をスッキリさせようと一番手になった。おしっこをしようとチャックを開け小さな、おちんちんを手に持とうとして背後から手が伸びて位置を合わされてしまう。

「え……」

「ほら出して」

「あ、あ……?」

背後にいるのは大人のようだ。まさかの一回目からの当たりにシヨータは身体が固まり冷や汗を滲ますが出ようとしていた尿は止まらず花男先生に支えながら出ていく。

ジヨロロロロオオオ……

「……う、うう」

「はー……いっぱい出てるね。溜めすぎると病気になっちゃうんだよ気を付けようね」

「……ひんっ♡」

花男先生に耳元に息を吹きかけられながら説明され不思議な感覚にシヨータ

の身が跳ねた。

「ほら、全部出さない」と

「え、あえ♡」

尿を出し切ったのに何故か花男先生が、おちんちんを撫でてくる。撫でられるとシヨータの身がプルプル震え熱が股間に集中していく。

「わあ……初めてか……」

花男先生はシヨータの上着下に手を入れて冷たい手で肌を撫でてくる。

「……う、や、やあ♡」

先生の手はシヨータの上着をたくし上げ胸部を出すと筋肉になる前の柔らかいところを揉んだ。

「はあ……柔らかい……♡」

「へあ♡」

先生が乳首を撫でるとシヨータの桃色乳首は朱くなっていき、ぷっくりと膨

れる。

「な、う♡」

ぷっくりと膨れた乳首を重点的に触られていると小さなショータの、おちんちんは芯をもつて上向いていく。

「う、う？」

ショータは初めての感覚に戸惑いながらも何かが来そうでドキドキします。
「よしよし、良い子、良い子」

乳首と、おちんちんを撫でられながら褒められてショータは、ぼうつとしながら先生に身を預けた。そして腰を浮かしながら尿が終わった先っぽから透明な粘付く液体を垂らす。

「はあ……♡　なんて可愛いんだ……♡」

先生の手は優しく動き続け。

「あ♡　ふあ♡　せん、せえ♡」

「うんうん♡ 我慢せずに、いっぱいビュービュー出そうね♡」

「あ、ああ♡ あううつ♡」

シヨータの身体に不思議な熱が広がり股間が異様に気持ち良い。身体から出て行く液体は、いつもの尿とは違い黄色みある白い液体だ。それが目の前にとぴゆとぴゆ吐き出されている。

「くうん……♡」

先生の優しい手で奥から液体は丁寧に搾り出され。

「先生が綺麗にしてあげようね」

先生はシヨータを自分に向かせると尿と精液臭い小さな、おちんちんを口に含み舐め取る。

「あえ？ あ、あつ♡ だ、めつ♡ また……つ♡」

ジンジンする、おちんちんを舐められて舌がシヨータの皮をむき丁寧に舌で綺麗にしていく。

「ふううつ♡ んうく♡」

先生のキレイキレイは長くショータの腰は再度、浮かぶ。

「で、ちやあつ♡」

びくんと腰が跳ね先生の顔に身を押しつけながらショータは人生二度目の射精をした。

ごくごくくつ♡ ちゅぷんつ♡

先生は呆然としているショータの身を整理すると頭を優しく撫で出入口に案内する。促されショータはトイレを出たのだった。

朝、学校に来たシヨータは昨日のトイレにドキドキしながらソツと入る。あれから皆の怪談調べに付いて行きながら感じた気持ち良さが忘れれず心、ここにあらずだった。

ちなみに花男先生の事は話していない。あれが何なのか、よく分からなかったけれど言ったら何だか恥ずかしい気がして喋れなかったのだ。

シヨータがトイレ内を見渡すと一番奥の個室から大人の靴が見え、ソツと近づく。

「おはよう。シヨータ君」

「お、おはようございます……は、花男先生……」

先生は、ニツコリと優しく微笑んでシヨータを自分の膝上に座らせた。個室の扉は開いた状態だ。

「あれ、シヨータ君……朝から乳首も、おちんちんも勃起してるね」

「……は、い♡」

花男先生が背後からショータを抱きしめながら撫で撫で。上着をたくし上げ乳首が両手指で優しく弄られるとショータの腰は無意識に揺れる。ズボンの下で、おちんちんは勃起を強くし少し痛い。

「はう、うつ♡」

ショータは我慢できずに自分で前を開けて勃起ちん棒を取り出した。

「はあ♡ 可愛いなあ……よし、じゃあ今日は先生と素股をしようか♡」

「スマタ……?」

ショータの白い太股の間に先生は勃起した肉棒を入れ込むと腰を揺する。

「んあ♡」

ショータの小さな、ちん棒と先生の肉棒が擦れ合い昨日より強い刺激に太股が閉じた。先生の肉棒がより固くなる。

ゆさゆさ、にちにち、こりこり……♡

腰を揺すられ擦り合さり互いから出た透明な液体が滑りを良くしていく。それに両乳首は先生に弄られた状態で気持ち良い。ショータが自ら腰を揺らして先生の肉棒に擦り付いていれば足音。

ドタドタドタ！

「うー漏れる漏れるっ」

「朝は冷え込むからなあ」

声の低さからして中等部か高等部の上級生の声だ。このマンモス男子学校は大きなグラウンドは小等部、中等部、高等部と三つあるが朝だけは部活で上級生が使い。小等部のグラウンドからトイレが近いのは、こちらなので早朝は紛

れ込んでくる。

二人の、おしっこを出す音を聞きながら先生と素股を続けるショータ。

びゅるるるる……♡

「……………つ♡♡♡」

唇を噛み頑張って声を出さずに射精をするショータ。そんなショータの射精に合わせて先生もショータの腹部、ちん棒、太股に大量に欲を吐き出したのだつた。

「おい、こんな所で寝てたら風邪ひくぞ」

「え……？」

気が付くとショータは服を整えた状態で蓋の閉じた便座に座り扉の開いた個

室で眠っていたらしい。上級生にトイレットペーパーで涙や鼻水、涎を拭われるシヨータ。

「よし……綺麗になった。ちなみに聞くけど女子ではないよね？」

「低学年って偶に可愛すぎるやついるよなあ……」

二人に支えられてシヨータは起き上がり御礼を行って教室へ向かったのだ。た。

☆☆☆続きは本編で！ ☆☆☆

サンプル【チョロいよ!ショート君☆ ～学校の七不思議

発行日 2023年11月13日

著者 いば神円(しんえん)
<https://www.pixiv.net/member.php?id=8224911>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
